# 厠 うんちくカレンダー

第5巻

私は、京都や奈良の寺院へ行って、昔風の、うすぐらい、そうしてしかも掃除の行き屈いた厠へ案内されるごとに、つくづく日本建築の有難みを感じる。茶の間もいいにはいいけれども、日本の厠は実に精神が安まるように出来ている。それらは必ず母屋から離れて、青葉の匂や苔の匂のして来るような植え込みの蔭に設けてあり、廊下を伝わって行くのであるが、そのうすぐらい光線の中にうずくまって、ほんのり明るい障子の反射を受けながら瞑想に耽り、または窓外の庭のけしきを眺める気持は、何ともいえない。漱石先生は毎朝便通に行かれることを一つの楽しみに数えられ、それはむしろ生理的快感であるといわれたそうだが、その快感を味わう上にも、閑寂な壁と、清楚な木目に囲まれて、眼に青空や青葉の色を見ることの出来る目本の厠ほど、恰好な場所はあるまい。そうしてそれには、繰り返していうが、或る程度の薄暗さと、徹底的清潔であることと、蚊の呻りさえ耳にっくような静かさとが、必須の条件なのである。私はそういう厠にあって、しとしとと降る雨の音を聴くのを好む。殊に関東の厠には、床に細長い掃き出し窓がついているので、軒端や木の葉からしたたり落ちる点滴が、石燈籠の根を洗い飛び石の苔を湿おしつつ土に沁み入るしめやかな音を、ひとしお身に近く聴くことが出来る。まことに厠は虫の音によく、鳥の声によく、月夜にもまたふさわしく、四季おりおりの物のあわれを味わうのに最も適した場所であって、恐らく古来の俳人は此処から無数の題材を得ているであろう。されば日本の建築の中で、一番風流に出来ているのは厠であるともいえなくはない。総べてのものを詩化してしまう我らの祖先は、住宅中で何処よりも不潔であるべき場所を、かえって、雅致のある場所に変え、花鳥風月と結び付けて、なっかしい連想の中へ包むようにした。これを西洋人が頭から不浄扱いにし、公衆の前で口にすることをさえ忌むのに比べれば、我らの方が遥かに賢明であり、真に風雅の真髄を得ている。強いて欠点をいうならば、母屋から離れているために、夜中に通うには便利が悪く、冬は殊に風邪を引く憂いがあることだけれども、「風流は寒きものなり」という斎藤緑雨の言の如く、ああいう場所は外気と同じ冷たさの方が気持がよい。ホテルの西洋便所で、スチームの温気かして来るなどは、寡にイヤなものである。ところで、数寄屋普請を好む人は、誰しもこういう目本流の厠を理想とするであろうが、寺院のように家の広い割りに人致が少く、しかも掃除の手が揃っている所はいいが、普通の住宅で、ああいう風に常に清潔を保つことは容易でない。取り分け床を板張りや畳にすると、礼儀作法をやかましくいい、雑巾がけを励行しても、つい汚れが目立つのである。奪で、これもタイルを張り詰め、水洗式のタンクや便器を取り附けて、浄化装置にするのが、衛生的でもあれば、手数も省けるということになるが、その代り「風雅」や「花鳥風月」とは全く縁が切れてし事つ。彼処がそんな風にぱっと明るくて、おまけに四方が真っ白な壁だらけでは、漱石先生のいわゆる生理的快感を、心ゆく限り享楽する気分になりにくい。なるほど、隅から隅まで純白に見え渡るのだから確かに清潔には違いないが、自分の体から出る物の落ち着き先について、そうまで念を押さずとものことである。いくら美人の玉の肌でも、お尻や足を人前に出しては失礼であると同じように、ああムキ出しに明るくするのは余りといえば無躾千万、見える部分が清潔であるだけ見えない部分の連想を挑発させるようにもなる。やはりああいう場所は、もやもやとした薄暗がりの光線で包んで、何処から清浄なり何処から不浄になるとも、けじめを朦朧とぼかして置いた方がよい。まあそんな訳で私も自分の家を建てる時、浄化装置にはしたものの、タイルだけは一切使わぬようにして、床は楠の板を張り詰め、日本風の感じを出すようにしてみたが、さて困ったのは便器であった。というのは、御承知の如く、水洗式のものは皆真っ白な磁器で出来ていて、ピカピカ光る金属製の把手などが附いている。ぜんたい私の注文をいえば、あの器は、男子用のも、女子用のも木製の奴が一番いい。蝋塗りにしたのは最も結構だが、木地のままでも、年月を経るうちには適当に黒ずんで来て、木目が魅力を持つようになり、不思議に神経を落ち着かせる。分けてもあの、いささか木製の朝顔に青々とした杉の葉を詰めたのは、眼に快いばかりでなく些の音響をも立てない点で理想的というべきである。私はああいう贅沢な真似は出来ないまでも、せめて自分の好みに叶った器を造り、それへ水洗式を応用するようにしてみたいと思ったのだが、そういうものを特別に銚えると、よほどの手間と費用が懸るのであきらめるより外はなかった。そしてその時に感じたのは、照明にしろ、暖房にしろ、便器にしろ、文明の利器を取り入れるのに勿論異議はないけれども、それならそれで、なぜもう少しわれわれの習慣や趣味生活を重んじ、それに順応するように改良を加えないのであろうか、という一事であった。

谷崎潤一郎「陰影礼讃」より

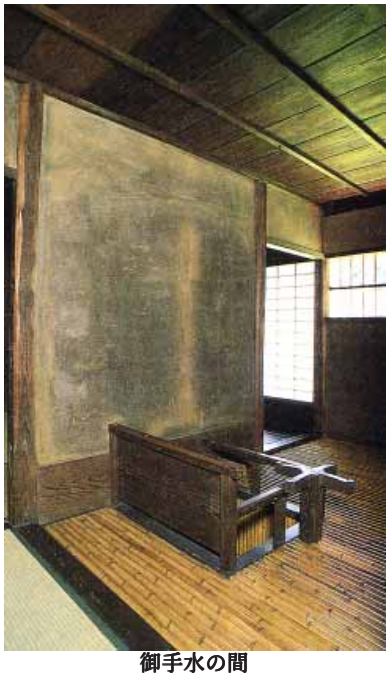
E.S. モース スケッチ
明治初期の浅草商家の便所内部

# 桂離宮御殿

茶の精神と茶室建築の意匠を吸収して生み出された数寄屋造り住宅建築の頂点に立ち、ブルーノ・タウトをして”日本建築の世界的奇跡”と言わせたのが桂離宮御殿である。この御殿には６ケ所の厠が造られている。その中でもっとも趣向を凝らしてあるのが御殿南西隅にある厠である。手前の小便所と奥の大便所からなり入り口にはお手水の間がある。大便所は通常は茶室に使われている台目畳(縦が4.5尺）2畳敷きで床の間と板の間がある。板張りの奥に木製の朝顔形小便器があり、床下には玉石を敷き込み自然吸引式の工夫がなされている。漆塗り(春慶塗)の大便器は中央から西に寄せられており、壁紙は黄土地に雲母で小桐文が施され、床の間には香炉が置かれる。また高床式を生かし便器の下には檜の葉を敷いた引き出し式の樋箱に似た箱が用意されている。

高床式の美しい数寄屋造り御殿

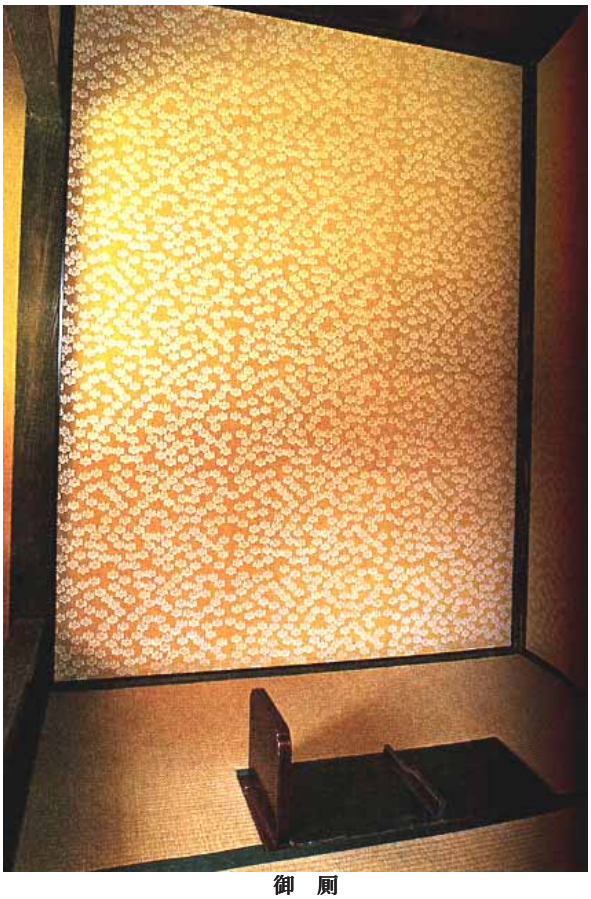
廊下奥木製朝顔形小便器



御手水の間

御化粧の間と厠の中間にあり御厠の前室となる。竹張りの床に流し口と樋台が設けられている。流し口の床下にも玉石を敷きこんである。竹簾の子の中央の蜘蛛の手の上に木桶を置き手洗いに使用した。

樋台と蜘蛛の手



御　厠

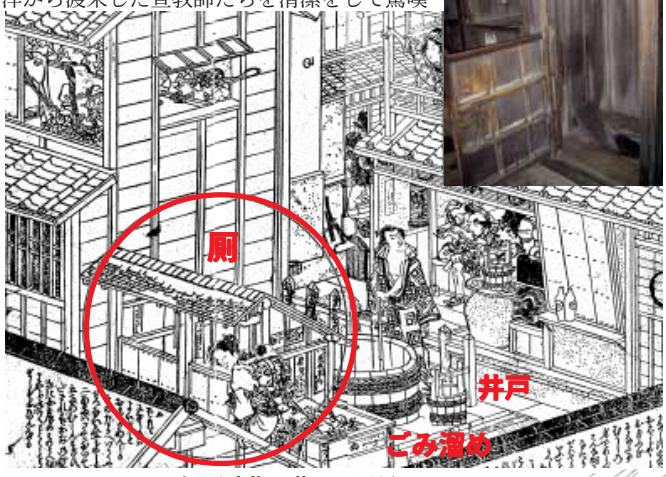

うんちく資料
図説 厠まんだら　INAX
日本トイレ博物誌　INAX
便所の話　鹿島出版会


2004年　**1　月**

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 1 | 2 | 3 |
| 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
| 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
| 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 |

# 江戸時代の厠事情

江戸時代、庶民の住まいはほとんどが長屋であった。そこでは顔なじみで使用する共用の厠が設けられていた。その厠も江戸と関西で造りが異なる。全面が板敷きで排便用の穴が作られ、戸で外から見えなくなる関西の惣雪隠と、便つぼの上に踏板が２枚渡してあるだけで、戸も下半分しかない江戸の惣後架との違いである。また、屎尿処理にも違いが見られる。関西では長屋の屎は家主の収入、尿は借家人尾収入となり、特に尿は蔬菜にとって即効性の高い肥料となったので野菜と交換された。この慣わしが18世紀の中ごろまでおまるの中の屎尿を窓から街路に捨てて異臭を放ち不潔極まりない西洋から渡来した宣教師たちを清潔をして驚嘆せしめた。公衆便所の源となる路傍に桶を置いた辻便所となる。このように屎尿を大切にすることは関東より関西において早くからみられた。この尿を大切にすることと辻に置かれた小便担桶の存在が京都女性の立小便の姿になったと考えられる。江戸では肥として屎だけが扱われ借家人の屎代はすべて大家の収入となった。長屋の厠は複数であるのが普通で井戸とごみ集積場と隣接しており現在の感覚とは異なる考えで設けられていた。




江戸時代の暮らし風景

**左　惣後架の復元写真**
戸が半分しかなく外から使用している人の姿が見えてしまう。

**江戸時代の路地裏の暮らし復元展示**

**京都，大阪地方の共有便所　惣雪隠**
江戸の惣後架に比べはるかに整って造られている。

**裏長屋の日常**

**江戸深川町人生活風景の復元**


**うんちく資料**
図説 厠まんだら　INAX　すまいの火と水　彰国社
便所のはなし　鹿島出版会　江戸厠百姿　三樹書房
落語と江戸風俗　教育出版


2004年　**２　月**

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 |
| 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 |
| 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |
| 29 | | | | | | |

# 厠と親しい人形たち

厠と関連をもつ人形としては厠神として愛玩されている人形の存在がある。陸前の関所神人形、宮城の堤人形、秋田の八橋人形，金沢の夫婦人形などに便所の神さんという人形がある厠神の多くはとびきりの美人の神様と言われてきたようである．家を新築するとき便壷の下に紅､白粉，鏡，針などを埋める慣わしがあり、このようにしておけば美人の神様がやってきて厠を汚くする悪神を追い払うと考えたという．

金沢人形の厠神

博多人形の厠神

仙台堤人形の厠神

西洋に目を転じると何といっても小便小僧の存在であろう。マヌカン・ピスという愛称で親しまれているこの像は1619年に作られた。戦場にいた王子が敵に向かっておしっこをしたことが兵士を勇気付けたということで作られたという説が有力である。1987年少し離れた場所にジャンネケ・ピスという妹とも云うべきものが作られたという。ピスはピストルのピスにも通じる発射する､放射するという意味を持つ。

ジャンネケ・ピス

左　マヌカン・ピス
年１度､祭りにはベルギービールではなくワインをピスするとか

スペイン、バルセロナにクリスマス近くだけ姿を見せるウンコをしている人という意味のカガネーという人形がある。お尻を出してかがみ、その下にはうんちがのってりるという愉快な人形である。

カガネー

土佐の高知にほのぼのとしておおらかな女性を表現した郷土玩具の香泉土人形連ればりがある。連ればりとは連れしょんのことである。三人の女性が連れ立って立ちしょんをしている姿が表現されている。表現によっては卑猥に受け止められかねないものをユーモラスにおおらかに表現した温かみのある人形である。

連ればり人形
左右の女性は空を見上げてにっこり。

着物をまくり尻を出す後部


うんちく資料
便所のはなし　鹿島出版会
トイレのおかげ　福音館
高知県　土佐民芸社
厠まんだら　雪華社


2004年　**３　月**

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
| 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 |
| 28 | 29 | 30 | 31 | | | |

# サニースタンド

この風習は明治の末まで残ったらしく明治41年の福岡県の教育界で議論になった記録が残っている。現代でも高価な絹の靴下が使用されていた時代にはこの習慣が残っていたようである。日本でも昭和30年代には女性立位用の便器サニースタンドが発売され記録が残っている。現在でも国外に眼を向けるとかなりの国でサニースタンドが現役で使用されている。

**左**は現在東陶機器株式会社ＴＯＴＯ児童用ホームページに使われているカット

昭和30年代にTOTOが発売したｻﾆｰｽﾀﾝﾄﾞ

**上、左**は米国モンタナ州立大のサニースタンド。男性便所と同じく何の仕切りもなくスタンドが並んでいることに注目される。またそこには次の説明が掲示されている．

In using,may we suggest the following.....
1.Back up to the HY-SAN and straddle the fixture.
2.Assume a natural squatting position directly over the bowl.The fixture is designed eliminate the necessily of sitting on or touching it.
3.Keep feet flat on floor.

左はブリュッセル空港のサニースタンド
水洗ボタン上の使用方法を示した図に注目

弟の直治でさへ、ママにはかなはねえ、と言つてゐるが、つくづく私も、お母さまの真似は困難で、絶望みたいなものをさへ感じる事がある。いつか、西片町のおうちの奥庭で、秋のはじめの月のいい夜であつたが、私はお母さまと二人でお池の端のあづまやで、お月見をして、狐の嫁入りと鼠の嫁入りとは、お嫁のお仕度がどうちがふか、などと笑ひながら話し合つてゐるうちに、お母さまは、つとお立ちになつて、あづまやの傍の萩のしげみの奥へおはひりになり、それから、萩の白い花のあひだから、もつとあざやかに白いお顔をお出しになつて、少し笑つて、「かず子や、お母さまがいま何をなさつてゐるか、あててごらん。」とおつしやつた。

「お花を折つていらつしやる。」と申し上げたら、小さい声を挙げてお笑ひになり、「おしつこよ。」とおつしやつた。ちつともしやがんでいらつしやらないのには驚いたが、けれども、私などにはとても真似られない、しんから可愛らしい感じがあつた。けさのスウプの事から、ずゐぶん脱線しちやつたけれど、こなひだ或る本で読んで、ルヰ王朝の頃の貴婦人たちは、宮殿のお庭や、それから廊下の隅などで、平気でおしつこをしてゐたといふ事を知り、その無心さが、本当に可愛らしく、私のお母さまなども、そのやうなほんものの貴婦人の最後のひとりなのではなからうかと考へた。

この文は文豪　太宰　治「斜陽」の読み出し２頁あたりで目にする文である。爵位を持つ高貴な家庭の情景を書いたものである。古くから女性の立位での排尿の習慣は珍しいものではなかったようだ。江戸時代には野菜を生産するために尿を大切にした京都では四辻の木戸脇に桶を置いた辻便所では男性だけでなく女性も堂々と使用していることを滝沢馬琴が記している。

富家の女房も小便をことごとく立ったままする。従者を二、三人つれた女が、道端の小便桶に立ちながら尻を向けて小便しても、恥ずかしそうな様子もなく、笑う人もない。

京都島原遊郭入り口に置かれた尿桶


**うんちく資料**
江戸のおトイレ　新潮社
やんごとなき姫君たちのトイレ　TOTO出版
http://www.urinal.net/archive/Womens.html
http://www.toto.co.jp/kids/alacarte/04.htm


2004年　**4　月**

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 1 | 2 | 3 |
| 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
| 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
| 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | |

# 茶室の厠 砂雪隠

僧としての修行時代，陰徳をよろこび，人に知れぬように便所掃除にはげんだ宋代初期の禅僧の名 雪隠が厠としての雪隠の語源といわれている。雪隠は通常は砂雪隠を意味する。日常の生活のすべてを茶室内で行うという茶の精神から生まれている。片流れの屋根と片木戸の小屋に踏み石を一尺の間隔で置き穴の部分に砂を敷き詰める。茶会の際には特別に清掃し水を打ち、手桶に砂を山にして触杖をさしておく。客は雪隠の内部を見、亭主の心配りを感じ入るのが作法とされ雪隠拝見といわれる。雪隠の石庭を思わせる石組みもその大きさから置き方まで決められ、さらに砂を扱う触杖についても長さ、上下の幅と、厚みを示した図まで残されている。

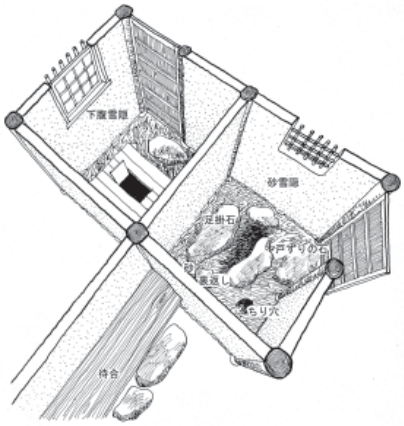
砂雪隠の使い方は触杖で砂をよけ紙を敷き、その上に砂をかけ直し用を済ませる。その後、触杖で紙の四隅が砂の上にわずかに見えるように 砂をかけて置く。

この砂雪隠は時代とともに形式的なものとなり荘雪隠（ｶｻﾞﾘｾｯﾁﾝ）といわれ、実際には下腹雪隠といわれるものが使用された。浜砂子を置いて石でつくられ下須瓶を埋め藁を落としたものの上に板を張りつくられていた。

京都　不審庵　砂雪隠内部

桂離宮松琴亭と砂雪隠内部

京都　不審庵腰掛より見た雪隠




一般的な砂雪隠の図

砂雪隠に似て　より贅沢な厠として谷崎潤一郎が芥川龍之介から聞いた話を文に残している。

倪雲林の厠の故事がある。雲林と云ふ人は支那人には珍しい潔癖家であつたと見えて、蛾の翅を澤山集めて壷の中へ入れ、それを厠の床下へ置いて、その上へ糞をたれた。つまり砂の代りに翅を敷いたフンシのやうなものだと思へば間違ひはないが、蛾の翅と云へば非常に軽いフハフハした物質であるから、落ちて來た牡丹餅を忽ち中へ埋めてしまつて見えないやうにする仕掛けなのである。蓋し、厠の設備として古來このくらゐ贅澤なものはあるまい。糞溜と云ふものはどんなに綺麗らしく作り、どんなに衛生的な工夫をしたところで、想像すると汚い感じが湧いて來るものだが、此の蛾の翅のフンシばかりは、考へても美しい。上から糞がポタリと落ちる、パツと煙のやうに無数の翅が舞ひ上る、それが各々パサパサに乾燥した、金茶色の底光りを含んだ、非常に薄い雲母のやうな断片の集合なのである、さうして何が落ちて來たのだか分らないうちにその固形物はその断片の堆積の中へ呑まれてしまふ、と云ふ次第で、先の先まで想像を逞しうしてみても、少しも汚い感じがしない。それともう一つ驚くのは、それだけの翅を蒐集する手數である。田舎だつたら夏の晩にはいくらでも飛んで來るけれども、今も云ふやうな目的に使用するのには、随分たくさんの翅が必要なのである。さうして恐らくは、用を足す毎に一遍々々新しいのと取り換へなければなるまい。されば大勢の人手を使って、夏の間に何千匹何萬匹と云ふ蛾を捕へて、一年中の使用量を貯へてゞも置くのであらう。とすると、とても贅澤な話、昔の支那でゞもなかつたら實行出來さうもないことである。

（厠いろいろ　昭和十年七月号　文芸春秋）


**うんちく資料**

谷崎潤一郎全集 21 巻　中央公論社
すまいの火と水　彰国社
便所のはなし　鹿島出版会
日本トイレ博物誌　INAX
厠まんだら　INAX


2004年　**5 月**

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 1 |
| 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| 23 30 | 24 31 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |

# 上便所の意義

桂離宮、伊勢神宮を建築の世界的奇跡とたたえ日本美の再発見者として知られているドイツ人建築家ブルーノ・タウトが厠のすまいでの位置に注目した。その著「日本の家屋と生活」に記述した。

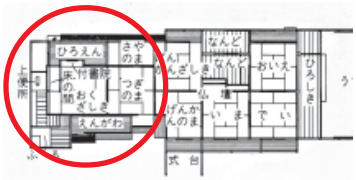
こうして便所の観察を続けているうちに、私は重大な文化的意義をもつ一つの発見をした。ここには壁一重を隔てて、実に著しい対照がある、壁のこちら側は人間にとって最も自然的な必要事を果す場所であり、同じ壁のあちら側はこの家の精神的中心、即ち芸術品、香炉、活花などのある床の間である。私にはこれこそ日本が、まったく対立した両つの世界--自然的必要だけの世界と純粋に精神的な世界との無比の対照として創造したところの象徴であるように思われた。私は更にこの考えを追究して、このような裏側と表側とがそれぞれ明確に表現している両つの世界の関係を解明しようとした。そして私の達した結論は --- 人間に自然的な必要事は生存に欠くことのできない根本的前提であるが、しかしそれは他方において精神的、文化的なものが高く保持されているからこそ、徒らな汚歳の念を超越してこの裏側にも行屈いた注意が払われるのである、ということであった。

上流民家の家人の使用する下便所に対して、客間の床の間、飾り棚の真裏に隣接する上便所もしくは上手水の意味を観察指摘した。また民俗学者は上便所の源は神便所であるとした。座敷は神聖な場所でありそこを使用する人は神もしくは神に準ずる人でありその方が使用する便所が床の間の裏に位置することは理解できるとしている．

合図若松　旧中畑陣屋奥座敷と上便所

三渓園内臨春閣住みの間と上便所

幸田露伴旧宅の書院とその裏の上便所




重要文化財吉村家の見取り図

松山市豊島家書院と上便所

**うんちく資料**

| | |
|---|---|
| 日本の家屋と生活 | 岩波書店 |
| 便所のはなし | 鹿島出版会 |
| 日本トイレ博物誌 | INAX |

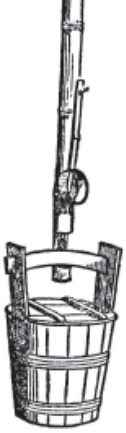
2004年　**6　月**

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
| 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 |
| 27 | 28 | 29 | 30 | | | |

# 便所まわり

便所まわりとしては手洗い、紙置き、そして音けしなどがある。このうち動物学者で日本研究家エドモンド・モースが日本人の清潔好きとして関心を寄せたのが手水鉢である。縁側のはし、厠のわきに置かれた水を張った鉢である。鉢は石、陶器、ブロンズなどで作られ、脇には竹で作られた柄杓が添えられ、そばに手拭掛がある。手水鉢は台や杭の上に乗せられ、その下は見苦しい水溜りができぬように小石が敷きつめられ、石が組まれたりして手洗いとしての役割以外に庭にひとつ茶道の手水鉢と一脈通ずる意味を残している。住宅構造の変化とともに明治期より便所に水道が引かれる昭和の中頃まで、手水鉢は衛生手洗器と変化し、上水道が完備し、水洗式の普及とともに直接に水道水で手を洗う器具へと変化してきた。

上のモースのスケッチに似る、重要文化財奈良市今西家の書院に残る石造りの手水鉢



エドモンド・モースのスケッチに見る手水鉢

大正時代町家の便所の復元と衛生手洗器

**明治中頃の衛生手洗器の広告**

陸軍病院での使用、灯りと温水器をかねた手洗器の工夫などが見られる。

まわり品で見逃せないのが排泄音を消すための品である。岡山県矢掛町の旧脇本陣に音消壺というものが残っている。身分の高いものが厠を使用するときこの壺の栓を抜き水の落ちる音で厠の中の音を消し、残った水で手を洗ったという。また厠土瓶、厠団子などというものを持たせ消音したともいう。現在は消音と節水を目的に音姫様なる機器がある。

龍の注し口のついた立派な音消壺

**音姫の宣伝文より**

女性は一回のトイレ使用で平均2.5回水を流す。ﾌﾗｯｼｭﾊﾞﾙﾌﾞの流水音でﾌﾟﾗｲﾊﾞｼｰを守り、節水を同時に実現する擬似音装置です。ﾃﾞｼﾞﾀﾙ方式音声合成で音の劣化もなく、快適に使えます。音姫を設置して節約できる水の量は、例えば女性が1,000人働くオフィスビルで1年間に2,385万L、水道料金に換算して約1,786万4,000円にもなります。[マイコン内蔵] センサに手をかざすだけで音を発生させ、残り時間を視覚表示します。いつ音が途切れるかという不安感を解消する安心機能付です。動作ランプの点灯により残り時間を表示します

**うんちく資料**

日本のすまい　内と外　鹿島出版　　トイレ考現学　啓文社
日本トイレ博物誌　　INAX　宿場町 矢掛　山陽新聞社

2004年

# 7月

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 1 | 2 | 3 |
| 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
| 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
| 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 |

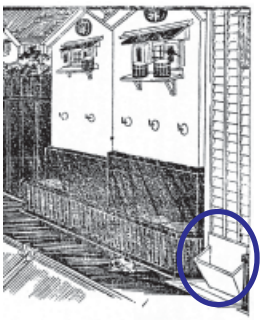
# 公衆トイレ

公衆便所の歴史は日本では1872年に横浜に大樽を地面に生めて板で囲いをしたものが最初といわれているが江戸時代にも小規模のものとしては江戸の路地に見られる小便用木製の囲い、京の路地に見られる尿桶、のように肥料にするため屎尿を集めるという辻便所として潜在的に存在していたと考えられる。対して西欧では屎尿を捨てる物として位置づけられていたために公衆便所の歴史は他の社会資源に比べてかなり遅れ、日本と同時期19世紀中ごろになった。

**1800年代中頃パリの木製公衆便所と個人用公衆小便所**
左写真の左奥に個人用公衆小便所が見られる

その後、公衆便所は現在も大都市に見られる地下設置が多い。

**地上からみた男女別に作られた地下公衆便所**



**江戸に見られた路地の小便所**

個人用有料便所

注目されるのは独立して設置される個人用公衆便所の存在である。現在でもヨーロッパには下の写真のように個人用有料便所が多く見られるが、日本人には個として公衆便所を捉える習慣はないであろう。いつの日か日本でこのように個人で個のものを使用することが普通になる日がくるのか。

**ドイツの有料便所**

**フランスの有料便所**

**使用説明**

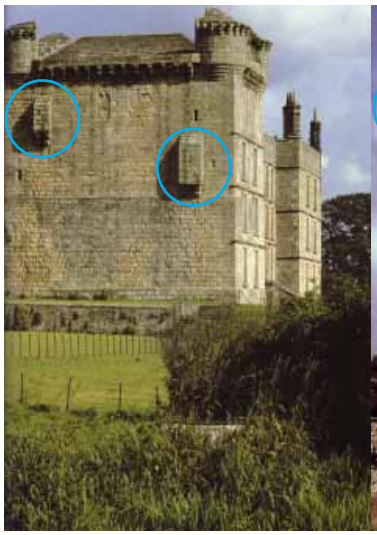
**右2枚はオランダの路上男性用小便器**

**うんちく資料**
トイレの文化史　ちくま学芸文庫
江戸厠百姿　三樹書房
スカラベの見たもの　TOTO出版
http://www.tiara.cc/~germany/index_topics.html

2004年　**8月**

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 |
| 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 |
| 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |
| 29 | 30 | 31 | | | | |

# 空中トイレ

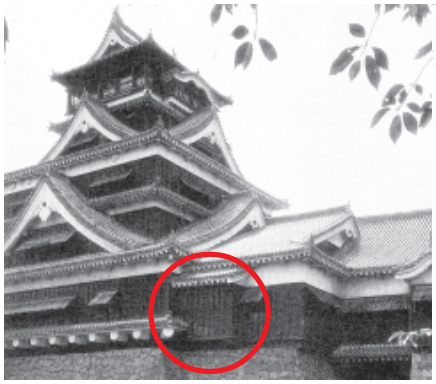


14世紀築城 Chipchase 城

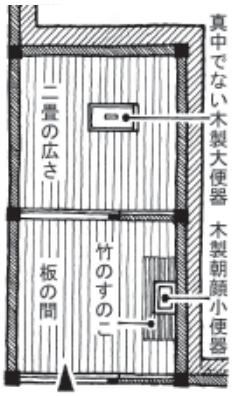
13世紀築城 Green 城

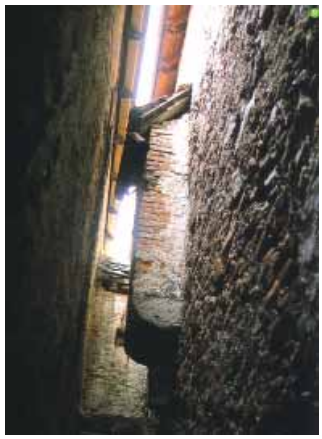
14世紀初期築城Beaumaris城の落下口

11世紀初期築城Liechtenstein城の落下口



17世紀築城 熊本城



隣家との境が汚物処理場

穴あき便器の下は隣家との境

城はその目的から居住には不向きな限られた空間構造のため排泄物の処理には苦労したようである。古くは安土城、姫路城の便所は天主の地階に造られ、これが一般的であったが、熊本城は天守の１階部分にヨーロッパに見られる空中便所がみられる。ヨーロッパで古城をみると高い部分に出っ張りがある。これは出窓ではなく、堀に排泄を落とすための便所である。便器の下ははるか城壁であったり、お堀の水面、そして処理は風雨に任せるというこの空中便所は日本では一部の城に限られるが、ヨーロッパにおいては城に限らず、街中にもみられ、宿屋などの共同便所として使われていたものが残っている（ウィーン）。処理方法は垂れ流し式であり雨水によって流す方法であった。桃山時代に来日した宣教師たちがその清潔な街に驚嘆した理由もこのあたりの事情を勘案すれば理解ができるというものである。


**うんちく資料**

ヨーロッパトイレ博物誌　INAX出版
河童が覗いたトイレまんだら　文春文庫
Temples of Convenience and Chambers of Delight　ST.Martin's Press

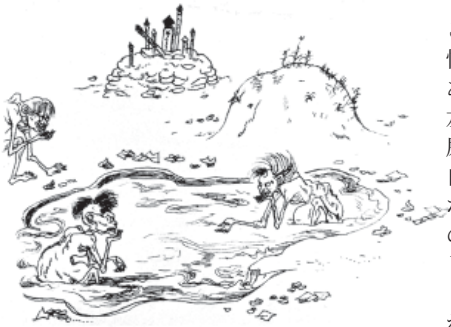

2004年　**9 月**

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
| 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
| 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 |
| 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | | |

# トイレ以前の市民生活

日本では上流階級においてトイレと場所が確立する前は住居の一定の場所で樋箱，清箱（しのはこ）という便器を使用して生活していた。しかし一般市民には平安末期にも便所という設備はなく空地、物陰で女も子供も老人もうずくまるか股を開いて用を足している図が国宝「餓鬼草紙」に描かれている。この時代より紙、糞べら(籌木)を始末に用いてた事がわかる。注意されるのは皆、高足下駄を履いていることである。個人持ちか共用物かははっきりしないが下駄というものが一般市民の便所に変わるものとして存在し、「宇治拾遺物語」に登場する「糞の小路」などがこのような場所であった。この「糞の小路」が天皇の命により「錦小路」になったという。

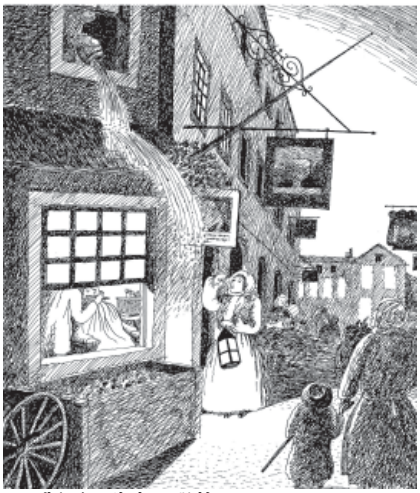
餓鬼草紙による伺便餓鬼の図



餓鬼草紙による糞尿泥地獄の図

このような生活習慣の中で土饅頭のある埋葬地の穴が左の図のような糞尿の溜池になり、自然に肥溜めとなった。この溜池の中で糞尿が発酵し養老律令時代よりそれまで使用されてきた家畜類の糞尿より肥料として有効なことを発見させる環境ともなった。この肥料として有効ということが屋外で勝手に用を足すことから便所に行くという生活に変化をもたらし、日本で始めて便所が南北朝時代の「慕帰絵詞」に汲取り式便所として描かれるようになった。

一方、ローマ帝国時代のすばらしい水洗式便所がジンギスカンの襲来で消え、忘れ去られたというヨーロッパでは下水道の発達したロンドンにおいてさえ18世紀まで便所というものは出現しなかったと考えられる。豪華な椅子トイレといわれるものは存在したが、その基本スタイルは溲瓶（おまる）の使用である。溲瓶を如何に居心地よく、しかも豪華に使用できるかという観点で、革張り、ビロード張りの椅子、彩色されたきれいな溲瓶等が作られてきたが、肝心の排泄物の処理は何世紀もの間、垂れ流しの状態が続いた。自然の力が処理できる量を超す破棄がなされるパリ、ロンドンなど大都会は、汚物と悪臭と感染病の危険に絶えず悩まされる状態が続いた。



版画　路上の恐怖

「ギャルデ・ロー」「ガーディ・ルー」という「水に注意！」という掛け声とともに家々の窓から糞尿が投げ捨てられ、街は汚濁され、悪臭に満ちたという。左上は18世紀のイギリス社会を風刺した「路上の恐怖」という版画である。一方、パリも同じく公衆便所はなく溲瓶の撒き散らしに加え屋外の至る所での排泄行為が見られ、都会の空気は腐った空気といわれた。やっと、19世紀初頭になって、ロンドンで初めて排泄物を下水道に流す水運式下水道工事が始まり、現在の下水処理が始まった。

ここに共通するものが存在する汚物から衣服の汚れを防ぐ工夫である、日本では高足下駄、ヨーロッパではハイヒールである。ハイヒールは踵部分が残り女性の魅力を引き出すものとして今日に至っている。

樑の生垣で立ち糞するパリ市民


**うんちく資料**

図説 厠まんだら　INAX
絵巻物に見る日本庶民生活誌　中央公論
18世紀パリ生活誌　上巻　岩波書店
すまいの火と水　彰国社


2004年　**１０　月**

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 1 | 2 |
| 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
| 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 |
| 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
| 24 31 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 |

# チャンバーポット

チャンバーポットもしくはナイトポットとはおまるのことである。わが国にも古くから特殊な目的のために樋箱、清箱、溲瓶と似たものがあった。しかし基本的にチャンバーポットはヨーロッパにおいては排泄の道具とし欠かせないものであった。排泄はチャンバーポットをどのような形で使用するかの違いはあっても排泄物をチャンバーポットに一時ためそれを屋外に破棄するという椅子便器の使用が基本的形であった。そこに時代的変化と社会的地位でことなる使用方法がみられた。

オーストリ - 民家博物園に再現されたチャンバーポットの使用の様子

一般市民は左写真のようにベッドの下にチャンバーポットを置き、チャンバーポットを直に用いたようである。

一方、貴族階級においてもチャンバーポットを使用するという基本的なスタイルはなんらかわらず、チャンバーポットを固定する椅子の材質、飾りに贅を尽くしたり、チャンバーポットいれておく化粧箱を用意したり、居間には食事の後紳士淑女が用を足せるように人数分のチャンバーポットを収納できるサイドボードまでが使われた。

チャンバーポットを固定するものもベンチ式から重厚な書籍を横積みしたものを模した椅子便器、さらに金の鋲でベルベットをとめた豪華絢爛な玉座便器までがつくられた。

18 世紀初頭から 19 世紀後期まで使用された木製ベンチ式便器

18 世紀中頃に見られたポットをカモフラージュした便器

17 世紀前期のチャンバーポット

チャンバーポット自体も時代とともに材質、大きさ、形状、そしてデザイン、色彩すべて変化して次の美しい洗い出し便器、水洗便器へ姿を変えていった。

19 世紀前期のチャンバーポット

Alnwick 城のチャンバーポット

Raby 城のチャンバーポット用のサイドボード


うんちく資料
ヨーロッパ・トイレ博物誌　INAX
Temples of Convenience and Chambers of Delight　St. Martin's Press
Ostrereichisches Freilicht Museum Stubing bei GRAZ


2004年　**１１　月**

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
| 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 |
| 28 | 29 | 30 | | | | |

# 染付け、飾り付け便器

最近の便器は衛生的観点から白色もしくは白色中間色に統一され衛生陶器となっててしまってたが明治、大正期にはすばらしい染付け便器が厠に置かれていた。日本において木製便器にかわって陶器製便器が普及したのは1891年の濃尾地震後であるといわれそれ以前はかなり高級品であった。

ヨーロッパにおいては18世紀にあらわれた洗い出し水洗が1870年頃より本格的な水洗便所の普及しだすとともに金属、大理石製のものから汚れの付きにくい安価な陶器製便器にかわった。

木製黒漆塗り大便器

明治中期草花染付向高小便器

1883年洗い出し便器

1896年洗い出し便器

1907年洗い出し便器

明治中期草花染付角型大便器

旋回水流で“ぐるっと”
“静かに”“しっかり”洗浄

最新式の便器は？

希望小売価格：352,000円

便フタ「オート開閉」、洗浄「オート洗浄」、臭いを「オートパワー脱臭」汚れがたまらない「フチなし形状」、汚れを根こそぎ洗い流す「トルネード洗浄」(CM文より)


うんちく資料
ヨーロッパ・トイレ博物誌　INAX
日本トイレ博物誌　INAX
Temples of Convenience and Chambers of Delight　St. Martin's Press
http://www.toto.co.jp/products/toilet/t00016/index.htm


2004年　**１２　月**

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
| 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
| 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 |
| 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | |